

深思北京

2016年度中国語上級・北京研修報告集



東京大学トライリンガル・プログラム (TLP)

2016年度 中国語上級・北京研修——深思“北京”

中国の文化と社会を知るために、北京という場所でなにができるだろうか。

北京は中国の首都であり、政治の中心です。政治の影響力の大きさを考えれば、ある意味では経済の中心とも言えます。そして、現代アートに代表される新しい文化発信の中心であり、京劇に代表される伝統文化の中心でもあります。「老北京」と呼ばれる独特の文化が今も残っています。北京はじつにさまざまな顔を持つ、重層的な場所です。

この北京の地を舞台に、これまで学んできた中国語の力を試す現場で試す、それがこの中国語上級・北京研修——「深思北京」です。「深思北京」と名づけたのは、参加する学生の皆さんに、北京がもつ重層的な姿を体験し、考えてほしいと願うからです。

東京大学では、トライリンガル・プログラム (TLP) を前期課程で実施しています。英語と日本語、そして中国語に堪能な学生を育てるこのプログラムは、後期課程でも後期 TLP を開講しています。この北京研修も後期 TLP と連携した活動となっています。この研修の運営は、教養教育高度化機構国際連携部門のリベラルアーツ・プログラム (LAP) とグローバルコミュニケーション研究センター (TLP 担当教員) が担当し、中国人民大学文学院と北京戯曲評論学会のご協力をいただき、北京で開講されました。北京では、中国に関する講義や学生交流、政府機関や中国企業の見学や関係者との懇談が行われ、「北京」を体験し、中国語の応用力を磨くとともに、中国を重層的に考察する充実した一週間となりました。使用言語は中国語のみとし、日本語は原則禁止です。

今年度のプログラムには学部二年 3 名、三年 4 名、四年 5 名の TLP 履修生が参加しています。そのうち 5 名は現在中国に留学している学生です。

本冊子は、2016 年 11 月 13 日から 20 日の一週間における、東大生の北京見聞録であり、北京という新しき古都に対する思考集でもあります。

2017 年 3 月

目次

— 深・入北京 —

巨大都市・北京の秩序と混沌

陣野真希 1

徒然発見日記

竹原遼太郎 5

北京での文化活動

中越亜理紗 7

北京研修の感想

河瀬雅志 10

深思北京を終えて

村井玲央 13

中国の文化を形作るもの

佐々木智仁 16

— 思・議北京 —

中国文化の多様性

黒岩広大 18

深思北京

湯川利和 20

「文化」を理解するとは

縫部瑞貴 22

言葉の用法と習慣からみる中国人の価値観

佐藤雅士 26

中国の発展に伴う日中関係の変化

吉武にな 29

「『君の名は』が大好き！」その言葉に応えたい

山本さゆり 32



深
·
入
北
京

巨大都市・北京の秩序と混沌

陣野真希

北京研修五日目の金曜日に訪れた日本大使館がある朝陽区・亮馬橋は、東京とほぼ変わらないと言ってもいいほど整然とした繁華街である。ある時は政府の留学奨学金受給者として、ある時は立食パーティーの配膳アルバイトとして、何度も大使館を訪れたことがあるが、今回は横井全権大使に謁見するという貴重な機会をいただいた。やはり違う立場で訪れるたびに、新しい発見と収穫があるものだ。

まず在中日日本大使館について簡単な説明を受けた後、館内を見て回り、最後に大使公邸で横井大使に謁見した。我々を案内してくださった職員の方は皆中国語が堪能で、普段の業務でも中国語を駆使しつつ現地スタッフと協力して仕事を進めているとのことだ。「大学で中国語を学んでいた職員よりも、入省してから中国語学び始めた職員の方が上達が早い」というお話を伺い、EOPで一年半中国語を学んだからと言って、また漢字のおかげで他の国の留学生に比べて中国語を学びやすいからと言って、決して油断してはいけないと実感した。北京大学の対外漢語学院で中国語を学んでいるうち、普段は他の留学生と簡単な話題について取り留めのないおしゃべりをすることが多い。しかし、将来仕事で中国語が必要になってくると、より高度な



話題を中国人と議論しなければならなくなる。授業だけではなく、現地の社会人と関わることでできる活動にも積極的に参加し、大使館の職員の方なみの実践的な中国語を身に付けたいと強く感じた。

大使館、特に大使公邸は数々の和風の絵画を設えた応接間といい、わび・さびの精神を体現した和風庭園といい、日本の伝統文化発信の拠点になっていることがうかがわれた。周りがどんなに現代的な繁華街であつても、ここは日本の在中代表機関として、誇るべき伝統文化を保存し続けるのだろう。隠れ家のようなこの場所を、外交関係者だけでなく、民間の中国人にも是非知ってもらいたいと感じた。

横井大使との座談会で、我々は政治・経済・文化など、おのおのが関心を持つあらゆる角度から質問を投げかけたが、大使はどの質問にも納得のいく答えをくださり、大使の教養の深さを感じた。観光業界や芸能界とも協力しながら、国家間関係発展のために裏から仕掛けを作っているというお話を聞き、外務省は領土問題などの政治的でハードな側面をもつばら担当しているイメージががらりと変わった。領土問題は基本的に一方が得をすればもう一方が損をす

るゼロサムゲームであり、尖閣諸島をめぐる紛争が存在する限り日中間関係も改善しないのではないかなどと悲観的に考えることもあつたが、横井大使いわく、中国の経済発展に伴い訪日中国人旅行者が増えれば、日本に好意を持つ中国人も増え、日中関係の未来も明るいとのこと、民間交流の可能性に大いに期待しておいでだった。

横井大使とのセッションを通して、誰でも一度来れば必ず虜になるほどの魅力を持つ日本を改めて誇りに思うとともに、将来はやはり日本の魅力を世界に発信する仕事に携わりたいと決心を新たにした。

北京研修六日目の土曜日に訪れた石景山区は、五日目に訪れた朝陽区とは全く正反対で、田舎の農村の風情が残る混沌とした場所であつた。石景山区―北京の西側の外れに位置する老工業地区。地下鉄は一号線の西端が少し通っているだけだ。苹果園という名の一号線の終点駅は、本物のリングォ狩り園があるのでないかと、私の好奇心をそそる。普段、海淀区のにぎやかな学生街と、朝陽区の現代的な繁華街しか目に見えない私にとっては、完全に未知なる「老北京」の世界であつた。

ホテルがある西城区から石景山区に向か

うバスの車窓から見える景色は、みるみるうちに変わっていった。高層ビルは全くなくなり、街並みは次第に雑然としたものに、道行く人も高齢者が多くなつていった。鉄筋むき出しのゼットコースターのようなものが見え、これは遊園地なのかと京劇評論会の方に尋ねると、「これは古い工場群で今は稼働していないんだよ」と一笑された。遊園地と間違えるほどの規模の工場群は、石景山区のかつての繁栄を物語っているように思えた。

バスを降りるとそこには私が知っている北京とは全く異なる世界が広がっていた。舗装されきっていない道路、放し飼いになつている家畜、雑然とならぶ零細商店、そこできつい方言で客引きをする老人：まさに数十年前から全く変わっていないであろう混沌と呼ぶにふさわしい世界が広がっていた。休日のためか公園には多くの住民が集まつて、おしゃべりやダンス、太極拳にこうじていた。高齢者の住人がほとんどで過疎化が深刻なのが見て取れたが、皆生き生きとした様子で、隠居生活を満喫しているように見えた。地面にゴミが押しついたり痰を吐く人が多かつたりと、汚いと言ってしまうば汚いのだが、生活感あふれ

人情味のようなものが感じられる街並みであった。

しばらく混沌とした街並みを歩くと、法海寺と言う小さなお寺に到着した。そこでは普段は公開していない明代の仏像や壁画を見せていただいた。仏像は文化大革命の時に破壊されたのを再建したものだ、壁画は描かれた当時のままの姿を残しているとのことだ。雲や動物、ハスの花など、細部までもが丁寧な描かれ、背景には意味や物語が隠れており、大変興味深かった。まるで刀で彫ったかのように細く力強く描かれた獅子の体毛、菩薩の全身に張り巡らされた蜘蛛の糸など、細部は光を当てなければ分からないほど精巧に描かれていた。当時の職人の技術に感服である。続いて訪れた承恩寺では、収集品である漆器を見学し、館長による解説に耳を傾けた。漆器はどれも精巧な装飾が施されており、漆のつやつやした質感が艶やかな装飾をさらに際立っていた。

時間が止まったかのようにいつまでも混沌とした状態を保つのだろう。混沌とした街中にある法海寺と承恩寺が誇る精巧な文物を見た時が、まるで混沌の中に掘り出し物の宝物を見つけたような感覚であった。周りが混沌としている分、余計に宝物の魅力が光るのだろう。現代的な秩序と昔ながらの混沌、そしてその中に息を潜めている精巧な宝物：北京の多様性を反映した大変興味深い構造である。

その日の午後鑑賞した、中国の著名な書道家の生涯を描いた書道家「啓功」の中でも、石景山区のような混沌とした街並みを見てとることができた。人情味溢れる雑然とした街並みを舞台とすることで、映画のストーリー自体もさらに心温まるものになつていると感じた。この映画は啓功の幼少期・壮年期・中年期・老年期を巧みに行き来しながら物語が進んでくうえ、節目となる出来事があるたびに啓功の感慨を繊細に描き出しているために、映画に入り込みやすくなっているのだろう。映画を鑑賞した後は、監督や専門家を交えて討論を行った。抗日戦争や文化大革命、改革開放などといった歴史的背景を存分に反映していること、啓功の言動に典型的な中国の文化人

の特徴が集約されていること、さらに親子・師弟・夫婦などの人間関係の中に中国の伝統的な価値観がない方されていることなどといった指摘があり、どれも素人にとつては新鮮な観点であった。この映画を通してただ感動するではなく、中国の歴史や伝統文化に対する理解を深めることができた。石景山区に住んでいる一人一人の老北京人にも、昔から語り継がれる同じような物語があるのかもしれない、ふと思いを馳せずにはいられなかった。

はじめ研修の予定表に目を通したとき、故宮や天安門、雍和宮などといった歴史的名所が含まれていないことに気づき、少しもつたいたいような気がした。しかし研修を終えた今、一つ一つのプログラムの意義が理解できたような気がする。刈間先生が仰ったように、「何十年も残っているものを見るより、今会える人に会っておけ」ということもあるし、たまには観光地ではなく、確立した「秩序」を見に行くのだけではなく、老北京人の「混沌」とした生活にどっぷり浸かってみるのも、大変面白い体験である。秩序があるからこそ、混沌もさらに魅力的で貴重なものに感じられるものだ。

授業の関係で一部の活動にしか参加でき



なかった上、京劇評論会の方ともそれほど交流できなかったのが大変残念だった。しかし、この2日間で普段の留学生活ではなかなか発見できない「老北京」の魅力を存分に味わうことができたと感じている。このような「老北京」は現代失われつつある気がするが、これからでもできるだけ古き良き北京の「混沌」に触れ、中国という多様な国への理解を深めていきたい。最後に、貴重な機会をくださった「PP」の先生方、研修中にお世話になった京劇評論会や教授の皆様への感謝をもって、このレポートの締めとする。

徒然発見日記

竹原遼太郎

今、そこらへんを歩いている日本人に中国に対する印象を聞いたらどのような返答が帰ってくるだろうか。やったことはないが、だいたい予想がつきそうなものだ。コピー品、爆買い、領海侵犯、尖閣、南シナ海、反日、スモッグ等等：日本のメディアを通じて報道されるのは主にそうしたネガティブな色彩を帯びた事柄であるから。大入学前の自分、いや中国に行く前、大学一年生の頃の自分も似たようなものであった。メイドインチャイナといえば粗悪品。経済発展しているといっても、まだ技術とかは発展途上だろう。中国と日本？え？仲悪いんでしょ？etc.:そんな自分が、今回北京に行って従来の中国へのイメージを覆すようないくつかの発見をしたのでそれについてつらつら書いて行こうと思う。

というふうな導入ではあるが、予想外だったこともあれば当然予想通りだったこともあるわけである。そこでまずは予想通りだったことについて書く。まあ一番予想通りであったのは大気汚染であった。

ニュースなどで見ていた通り分厚いスモッグが街を覆い、太陽はそのカーテンに遮られて肉眼でも見えるほどであった。しかしこれについては別に毎日そうという訳ではなく、中三日ほどは晴天を見ることが出来たのは結構であった。ただ、よりによって一番大気汚染がひどかった日に、煤煙処理会社の見学が当たってしまったのは皮肉というか不運というか。少スキマズイ会社であった。しかし会社側の話によるとやはり近年はある程度の改善を見ているのだと言う。一刻も早く北京の空の帳が開けることを願ってやまない。



一番汚染がひどかった日に、煤煙処理会社の見学が当たってしまった

さて、いよいよもって本題である、中国での新発見について筆を進めよう。発見の第一として挙げたいのはやはり「技術の発達度合いである。経済水準がかなり高くなっているというのはいちろん知っていたのだが、全く中国の「技術革新、及び社会への浸透具合は日本をかなりの度合いで凌駕しているように見え、まさに予想外、吃驚」という感じであった。出会った多くの人が、微信が中国社会を変えたと言っていたがそれは決して誇張ではなく、信じがたいほど多くのサービスが微信を通じて提供されていた。APPもユニークなものがあり、不思議と忘れ物の神に愛された今回の旅行では、注文すれば忘れ物を拾って届けてくれるAPPが非常な効果を発揮した。刈間先生曰く、日本のソフトウェア開発が規制先行型である一方、中国のソフトウェア開発は思いついたらまずやってみるシステムであり、規制は後から追いかけるのであるという。アメリカのシリコンバレーの気風にも似た、先鋒独立の気風を感じた。おそらくではあるが、殆どの日本人は中国のこうした「文明の発達」に関しては無知であろうと思われる。

次に、(発見と言うべきかはわからない

のだが）店の店員までありとあらゆる中国人が親切であったことはかなり意外であった。日本人であるということである程度の岐視は覚悟していたし（南京では一度だけあった）、中国のサービスは荒っぽく不親切だというふうな思い込みがあったのだが、本当に今プログラムでは全くそのようなことがなかった。そうはいっても街の食堂とか、荒っぽいといえば荒っぽい所もなきにしもあらずではあるが、きつぷのあるフレンドリーな荒っぽさで、むしろ心地よいくらいのものである。

それにしても今回の研修での体験や夏の南京への体験を通じてしみじみ感じるのは中国の方々の日本に対する関心の高さである。様々な政治的問題が間に挟まることで、勝手に中国人は日本人が嫌いなものだと思っていたが、交流の結果実情は全く異なるものであった。本屋には日本関係の本が並ぶし、若者について言えば特に日本のアニメ漫画文化への造形が深く、夏に南京に行った時には、宿舍付近の本屋の店員に、夏目友人帳（漫画のタイトル）の新刊は出たか、と聞かれて、知らないものだからしどろもどろの返事しか出来なかったのは誠に「不好意思」である。夏目友人帳につい

ては、二〇一七年にアニメ第六期の放送が決定したようである。彼女も南京で首を長くして待っていることであろう。日本語が少し出来るという大学生もかなりいた。驚いたことに、彼らの多くはアニメや漫画を通じて独学で日本語を学んでいるのである。・僕、私日本語がちょっとしゃべれるんですよ。・え、どうやって勉強したんですか？・アニメとか漫画を見て独学で勉強しました。・割と定番のやり取りである。発見その三、中国の人たち、特に若者に関して言えば、アニメ漫画等の日本文化に関する関心が非常に高い。クールジャパンもなかなか侮れないなあと感じた次第である。しかしその一方でひしひしと感じられるのが日本人の中国文化に対する無関心、無理解である。中国文化もそうだし、中国人の日本文化への関心の高さといった実情を知っている人間が何人いることか。我々の側が大きく認識を改め、相互理解を發展させる必要を感じている。

以上、筆が走るまま、思い出すままにつらつら書いたのが、僕が今回の北京研修（一部夏の南京研修も含む）で発見したことである。これらの発見を通じて、僕の中国に対する認識はかなり変わった。中国の

技術は侮れないし、中国人が一概に反日であるというとは言えない。むしろかなり多くの若者が日本文化に対する高い関心を持っている、というふうにももちろん日本の報道における中国のニュースも事実であるには違いない。しかし、それらの報道の内容が中国の全てではないし、それらが中国の全てではないということを、様々な交流を通じてより多くの日本人が知るべきだと考える。現在領土問題や南シナ海の問題が、また日中関係がこじれているようであることが出来れば、きつとそうした問題の平和的解決も可能になるはずである。日中間交流の深化、それを通じた相互理解の發展というものが、今後益々重要な課題となりそうだ。



ドラえもんバイクもあった



北京での文化活動

中越並理紗

今回の北京研修は北京戯曲評論学会の方々のお力無しにはありえなかった。京劇という文化のもとにそれぞれの分野でご活躍されている方々が集まり、学会を組織しているのである。そうして、刈間教授と学会とご縁で、今回のように我々をいろいろな場所に招待してくださったのだった。そして、ここでは北京研修において体験した文化活動について述べようと思う。「文化」というと広範囲であるが、具体的には

京劇、美術、出版物、文学、娯楽などソフトパワーの側面を見ていく。

まずは京劇について。私は去年南京で崑曲を観劇したことはあったが、京劇はまったくの初めてであった。京劇の基本的なことを学ぶため、我々は北京京劇院に行き、内部の展覧室へと通してもらった。そこには京劇の歴史に関するパネルのほか、梅蘭芳や梅葆玖をはじめとする名優たちが身に纏った衣装、小道具、舞台セットなども展示されていた。伝統を継ぐだけでなく京劇の新たな試みについての紹介もあった。現代の題材を用いてミュージカルのような舞台を作ったり昔のものをアレンジしたりしているらしい。また、北京京劇院では二月からの公演で、オーケストラと京劇をコラボさせるといふ斬新で大掛かりな舞台の稽古も見せてもらった。楊貴妃を演じる主演女優の稽古である。この時は崑曲の元女優のインストラクターがいらっしゃっていた。京劇と崑曲には、勿論似ている部分もあるが、違う部分も多々ある。今回は崑曲特有の優美な動きを京劇に取り入れるという新しい挑戦であったようだ。崑曲のほうが女性の動きがゆったりとしているのがわかった。それを楊貴妃の振る舞いに導入す

るということだった。その後、私たちは北京戯曲芸術職業学院という京劇役者の養成学校にも訪問した。中高生たちが通う全寮制の学校で、他の教科もこなす毎日。彼らの目つきは真剣そのものだった。中国政府が国家の予算で大きな奨学金を出しているとも聞いた。国が伝統を守るために尽力しているのが伝わり、こうして京劇は後の世代にも継承されていくのだと感じた。後日、長安大劇院にて京劇の舞台を観た。演目は『小放牛』、『白蛇伝・祭塔』、『三娘教子』、『小商河』だった。豪華な衣装、ものすごい迫力の歌、繊細な立ち居振る舞い。観ているこっちまでかなりエネルギーを吸い取られたが、非常に価値のあるものを観たと感じた。

次に、石景山で目にしたものについて述べたい。石景山区の町並みはとても古く、若い人は都心に出ている模様で、お年寄りとは小さな子供ばかりだった。北京の中心部とは大違いで新鮮ですらあった。そこで私たちは二つの寺へ向かった。先に訪れたのは法海寺である。区役所の許可を得て特別に入ることができた非公開の大雄宝殿の中には、菩薩や仏が描かれた明の壁画があった。中は真つ暗で、ライトを各自持った

観察だったが、美しさ、細かさ、技術の高さ、繊細な色合い、金やシルクの素材、筆遣いによる立体感のはつきりと見えた。ちなみに、そのレプリカが薬師殿の方に展示されていた。もう一つ見学したのは承恩寺だった。石景山には辛亥革命時に清朝宮廷の美術家たちが逃げてきて芸術活動をひそかに続けていたという歴史がある。私たちが訪れた時期は、ちょうどこのお寺の建物を使って中国各地から優れた作品が集う展覧会が開催されており、館長の方が直々に案内してくださった。昔からあった伝統的な手法を用いた古典的な作品もあれば、新しい作風の芸術品もあり、様々なものが見られた。

また、私たちは中国外文局（中国国際出版集団）にも参った。一見民間企業のように思えるが、これは中国政府の機関であり、従事する人たちは日本でいう準公務員のような立場である。ここでは「人民中国」という雑誌の編集長とお会いした。私は大分で英文学を専攻しており、現在は日本と海外の出版社をつなぐ出版コンサルティング会社でインターンをしている。将来は学者志望で出版や翻訳は特に興味を抱いており、このような場所に赴くことができたの

は幸運であった。「人民中国」は政府の下での日本語による中国のPR雑誌だが、一方的な発信ではなく双方方向の交流を非常に大切にしている。読者からコメントを募集したり、日本語作文コンクールを開いたり、日本の学生を中国に招待するようなイベントも行っている。最近ではオンライン版にも力を入れ、微信や微博でのコンテンツも充実させている。



「人民中国」王衆一編集長

このような編集部のオフィスで、編集長から直々に、中国の雑誌の記事は表面だけ読んでもわからないことがたくさんあるということ聞いた。どういう人物が、どういう思いで、どういう記事を書いているのか。立ち止まって噛みしめてみる必要があるのだ。メディアの世界には「犬が人を噛んでも記事にはならない。人が犬を噛んだら記事になるのだ」という言葉があるそうだが、中国の雑誌では「犬が人を噛んだ」というような記事の奥に深いバックグラウンドが存在していることもあるのだ。例えば、「人民中国」の二〇一六年十一月号には、ある高齢男性の「美しい中国・自転車で走る山東・江蘇」連載記事がある。一見普通の記事に思えるが、筆者の劉世昭について知ると見方が変わってくる。彼の祖父は中華民国の軍人、劉文輝（1895 - 1976）である。そして彼の弟が劉文彩（1887 - 1949）という四川省の大地主であり、文化大革命時代には厳しい目にあったのだ。劉家はこのような苦難を経験してきた家系であり、劉世昭自身の人生にも辛いことが多々あった。そのような人物が中国の広報的役割を担う事業に携わり、自分の感動を日本の読者へと発信し、中国の魅力



を紹介しているというのだ。なんて面白い人物だろう。雑誌の記事にはこのように深い意義が隠されていることもあるということを知った。

最後に、中国人民大学における学生交流で感じたことを挙げる。こちらで私たちは文学院の授業に参加させていただき、魯迅についての講義、アイリーン・チャンについての授業、文学理論の授業を受け、現代漢語の授業で『史記』の一部を読んだ。初日の午後には現地の学生たちと首都博物館に行つて、北京市の歴史に関する常設展と清朝の宮廷についての特別展「走進養心殿」を観た。とても立派な博物館で、国家権力による保護を目的にしたように思う。そして、二日目の学生間交流の時間では日本のアニメを鑑賞し、最近の日中両国での若者文化についてディスカッションを行った。こうして活動を見てみると、私たちが主に繋がっているのは両国のカルチャーなのである。ソフトパワーを通じて親睦は深まるのだと改めて認識した。後述するが、日本大使館でお話しを伺った横井大使のお言葉が今となってはこの活動とつながる。

古い文化も、新しい文化も、多様な文化も我々は大切にしていかなくてはならない。中国において、文化の伝統が継がれる基盤は政府によってしっかりと作られている。それが「変わらないもの」として存在するのだと思う。尚且

つ、中国は非常に発想が柔軟でアイデアが豊富な国であり、新たな芸術的な試みもたくさん芽生えている。このことが「変わるもの」であろう。今回私たちは一週間という短い期間を北京のみで過ごしていたのだが、中国は広大であり悠久の歴史を誇っている。なので、もちろん共時的・通時的な「多様性」は計り知れない。最近ではどちらかというアニメ、本、ファッションなど現代の日本文化の方が中国へと伝播しているようだが、もつと現代の中国文化が日本に紹介するのも日本と中国の人々を繋ぐ手段として有効だろうと感じた。

北京研修の感想

河瀬雅志

伝統と新しい文化が共存する街、そんなイメージを漠然と北京に対して持っていた。はつきり言って、中国文化についての知識などほとんどなかった。大学2年生時に「FIB生」として、南京大学サマースクールに参加させていただき、その際に昆劇を見たが、特にそれについて関心もわかなかった。今回北京研修に参加させていただいたのは、純粹に中国における北京文化に対する興味からだ。想像以上の経験をした。それを自分の中でもまとめるために、以下に項目ごとの感想を述べる。

書道

現在の中国二〇大書道家に挙げられているという、徐玉良の話聞いた。彼によれば書道において重要なことは以下のことのようにある。まず、基礎的な技術を身につけるために、顔真卿、王羲之などの古典の字を何度も真似をする。そして、書道においては書く前にすべてが決まっておき、初めから終わりまで、一貫して書いていく。

その時、気持ちと環境が一致することが重要である。その気持ちは書く文字の意味と一体化させる。そして、書道は、確かに最初は人の字をまねることから始まるが、自分の個性を出すことが必要となる。その個性が文字に現れる。したがって、その書が素晴らしいものとなるか否かはその人の品位、人と為りにかかっている。書く人の品格、これが最も重要になる。

というようなことを仰っていた。そういうわけて思い出したのは、南京大学サマースクールの際に見た毛沢東の書であった。自由闊達な彼の字は流れるようで美しかった。毛沢東にカリスマ性があったのは、その字の美しさにもよったのだろう、いや、むしろカリスマ性が字に現れているのだろうと考えられた。

京劇

まず、京劇の舞台裏を見せていただいた。そこでは昆劇の師範が役者に細かに指導している姿を見た。そこまでするか、というほどの細かさで指導していたが、それを実行する人の実力も大したもので、ますます役者の動きが優美なものになっていくのが見て分かった。通常見せてもらえないこの

ような場所を拝見させていただいたことで、京劇の奥深さというものを間近で感じることが出来た。その後、京劇学校に行つた。京劇学校では、一〇〇〇人の生徒が京劇を朝から晩まで学んでおり、大体五歳になるころから学校で訓練を始めるとのことだった。そこで、少年少女の演技を見せていただいた。少年と馬鹿にすることは出来ず、もうそこには演技に対する絶対的な自信というものを感じた。彼らが十六歳であるというから驚きだった。また、基本姿勢というものを体験した。その姿勢は想像以上につらいもので、一分間とその姿勢を保つことが出来なかった。これをいとも容易く行う彼らは、とんでもない時間の練習をしているのだということ身を以て体験した。

こうして期待が高まるなか、実際に京劇を見た。物語の内容が込み入っていて、よくわからないものもあったが、その動きの優美さや、豪快さ、繊細さ、音楽と動きの一体化、歌の美しさ、など見るものを圧倒する芸術だった。中国の文化人に会わせていただく機会がプログラム中に何度かあったが、彼らはみな京劇が大好きであり、中には食事の席で歌って見せて楽しませてく

れる人もいた。彼らがこれだけ京劇が好きなのは、京劇の素晴らしさにかんがみれば、さもありませんと納得した。

映画

有名な書道家后功の映画鑑賞会があった。その映画では、彼が日中戦争や文化大革命を経験しつつも、それに耐え忍ぶ姿や、後進の学生の指導を思案している姿、妻への愛情などが描かれていて、メインは彼の生きざまにあった。映画を見終わると思わず涙が出るほど感動する映画だった。その後、刈間先生含め、中国の文化人による討論が行われていて、映画の奥深さというものを感じた。一方で、私は中国と日本の文化の共通点というものを感じ取った。「これを仮にヨーロッパの人が見たら共感できるだろうか？きつと共感しないだろう」と思われた。何をもって美德とするのか、この点について日本はかなり中国からの影響を受けている。儒教が日本人の価値観に与えた影響というものはとても大きいものなのだ、と改めて感じられた。今でこそ、「中国人はマナーが悪いし、日本の方が文化的に進んでいる。」という一般人がいて中国文化の日本に対する影響を自覚的に意識す



上映前に丁震監督とフリートーク

ることはないが、やはり儒教は日本人のメンタリテイに大きな影響を与えている。もう一度、儒教について深く考察してみたいなど感じた。

文学

人民大学で中国近代文学の授業を聴講した。その授業では魯迅の文学作品が、中国人作家や日本人作家に与えた影響を論じていた。正直自分の中国語能力不足により、それほど理解することは出来なかったが、

とても興味深い内容だった。そういえば、昔だけでなく、近代においても中国人の作家は日本に訪れており、日本の文化に影響を与えていたんだなあということに思いを馳せた。では、日本人作家で中国の文学作品に大きな影響を与えた人はいないのだろうか？などと興味が膨らんだ。

寺

法海寺という寺に行った。実はそれほど期待してなかったし、寺なんて京都にいっても趣あるものがあるから、行く必要ないでしょと思っていた。しかし、想像を大きく超えるほどに感動した。法海寺では、普段一般人に開放されていない壁画を見せていただいた。壁画には物語が紡がれており、一つひとつの描き方すべて意味があった。その描く技法というものも恐るべき技術であり、驚嘆した。これが一四〇〇年代に作られたものであるというから驚きである。ガイドの方が中国語で説明していたが、仏教は日本人にもなじみがあり、知識があるので内容も理解できた。ここでも、文化の共通点が共感を生むということを感じた。他にも、文革時代に虐げられてきた伝統を残してきた場所で、様々な伝統工芸品を

見たが、その技術は筆舌しがたいものだった。中国の伝統技術に対して改めて敬意を払った。

人民大学生との交流

一日半人民大学生との交流があった。やはり、同年代の学生と話すことはその学生がどんな興味を持っているかを知ることが出来るし、とても楽しい。一方で、人民大学生はなぜ、東京大学生を案内するという交流イベントに参加したのだろうか？時間も取られるし、これについては少し疑問があった。しかし、その謎もすぐ解けた。彼らは、アニメや漫画を通して日本の文化に触れており、日本に好感を抱いている、もしくは興味がある人たちだった。逆に私が知らない漫画などたくさん知っていて、日本のソフトパワーの力に驚くとともに、中国の学生がそれほど日本に対して悪い印象を抱いていないことを感じた。それは、このプログラムに参加してくれた学生だけでなく、ほかの教室で授業を受けた時にも感じたことである。先生が私たちを紹介すると、学生のみんなが歓迎の拍手をしてくれた。今後日中関係は、個人間という視点では改善していくのだろうなという直感が

あった。

横井大使のお話

様々なお話を聞かせていただいたが、その明晰な分析のみならず、人柄に惹かれた。日中関係というのは、政治、経済面、国民という段階に分けられて、国民という段階では日中関係が好転していくと考えられる。日本が嫌いな中国人は、おおよその場合日本人を見たこともなく、日本についてよく知らない人である。それが現在はアニメなどを通して日本の文化について興味を持つ人が増え、日本に観光する人もますます増えている。このような状況のもとお互いの理解が進めば状況は好転する。ということを書いていた。経済援助の意義ということについても語っていて、また芸能界における中国との関係などについても語っていた。仕事をやるときのスタンスや、面白さなども語ってくださり、とても多くの時間を割いて話してくださいました。その話しぶりも人懐っこいと言ったら変だが、とても親しみやすいもので、人柄にも深くひかれた。この人が大使なら日中関係も安心だな、そう思わせる人だった。

以上のような経験をしたが、これ以外にもたくさんさんの経験を1週間という短い期間でした。この経験から感じたのは、北京は外見上は異常な速度で発展しているが、そこには深い伝統というものがしっかりと根付いていて、それを当然のごとく文化人は教養として持ち合わせていること、およびその文化、伝統の素晴らしさというのは、やはり我々でもわかるものであり、その文化を尊敬、尊重すべきものであるということ、その国の人と仲良くするために何よりもその国の文化を尊敬、尊重することが必要であるということ、中国人は日本の文化について多くのことを知っているが、我々日本人も中国文化についてもっと知るべきであること、人と人との関係は国と国との関係と異なり、その人を尊重することから始まること、などなどである。

やはり、中国は面白い、そう思った1週間だった。今後も何らかの形で中国に関係する仕事をしたい。もっと中国語、中国文化に対する理解を深めたい、そう思った。

深思北京を終えて

村井玲央

私は二年生時に参加させていただいた南
京大学サマープログラムに続き、今回の
「北京研修」の活動を通して中国の伝統文
化への理解を深めること、現地の大学生の
生活を体験すること、普段はまず会えない
ような中国社会のトップで活躍する多くの
方々のお話を聞くことなど多くの有意義な
ことを達成することができたと思う。また
東京大学からの優秀な参加者たちから大き
な刺激をもらうこともでき、大変満足でき
る内容のプログラムであった。

まず感動したのは北京の伝統文化の豊か
さである。私たちは三日目にプロの役者の
京劇の練習風景を見学させていただき、そ
のあとに京劇学校に行つて京劇体験をし、
学校内の京劇博物館を参観した。プロの方
の練習風景を見ることは極めて貴重な経験
であり、またほんの一部の場面を何十分も
かけて練習していたことから本番で演じ
られている京劇が完成するまでに途方も
ない時間がかかっていることがうかがい
知れた。京劇学校では現在十代の生徒約

一〇〇〇人が寮生活をしながら京劇と普通
の科目を学んでおり、規模の大きさに驚か
された。彼等の生活は朝から夜遅くまで勉
強と京劇の練習でびっしりと埋まっている
そうで十代の少年少女たちにはかなり厳し
い環境である。しかしその分成長も早い
か、彼らのパフォーマンスには幼さの残る
顔つきからは想像できない動きのキレと迫
力があった。このような大規模な学校が運
営できているのは政府の力によるところが
大きく、中国政府の伝統文化を守つてい
こうという姿勢が垣間見えた。別の日には
実際に劇場で京劇を見ることができた。南
京大学サマースクールに参加した時にも昆
劇を見る機会がありその時には字幕につい
ていくことができずあまり楽しむことがで



私たちがチャレンジしてみた



きなかったが今回はストーリーを追うこと
はできたので自分の中国語が当時よりは進
歩したと実感できた。しかしながら京劇を
完全に楽しむには中国の古典や歴史、文学
への深い理解が不可欠であり、それは今後
の課題として勉強していきたい。私たちの
言った京劇劇場は大変盛況で、今現在も庶
民レベルで京劇文化が浸透し脈々と受け継
がれていることが分かった。また、最終日
前日には石景山地区の寺院二ヶ所を参観し
た。石景山地区は北京市内では辺鄙な場所
にある農村的な地域で北京市内とは思えな
いほど粗末で汚い、普通の人が想像するで
あろう昔の中国のような風景が広がってい
た。一ヶ所目は明清時代の壁画が保存され
ている寺院で、一般には解放されていない
場所である。ここは壁画を守るために建物
内部にライトが一切設置されておらず、懐
中電灯の明かりを頼りに見学した。保存状
態が良いために内部の壁画は今でも鮮やか
で美しく、これほどまでに厳重に守られて
いる場所を見学するのは初めてだったため
とても興奮した。二ヶ所目の寺院には北京
の伝統工芸品を展示するスペースが設けら
れており、とても精巧な漆器や彫刻を間近
に眺めることができた。この場所は各国の

大統領夫人も見学したことがあり、一般には開放されていない場所であるとのこと。どういった博物館でもあまりお目にかかれなような貴重なものを間近に見ることができて非常に幸運だと思った。私の知識不足ではあるが、以前は中国の伝統文化は文化大革命により完全に破壊されて廃れたものとばかり思っていた。しかし実際は文革期もひそかに継承されて現在まで受け継がれており、しかも多くの人々に愛され、国内外含め多くの観光客を呼ぶ力も持っているということを学んだ。

二つ目に印象に残ったのは人民大学の学生たちとの交流である。現地の学生にキャンパスを案内してもらい、食事をし、討論をし、授業を受けることで中国の大学生の生活についての理解が深まった。中国の大学は日本のものと比べて圧倒的に規模が大きい。大学内にスーパーマーケットがあり、露店があり、学生のほぼ全員が暮らす寮があり、さらにはカラオケやビリヤード場まであるという。人民大学は大学内だけで生活が成り立ってしまう一つの町のような場所だった。現地の大学生と一緒に本科の中国古典、文学史、文学の授業に参加する機会もありとても新鮮だった。私は東京大学



以外に南京大学と香港大学でも授業を受けたことがあるが、南京大学では日本人と一緒に主に中国語の語学を学び香港大学では英語で授業を履修していたため、思い返すとこれが中国本土で中国語で専門科目を勉強する初めての体験だった。語学力不足と前提知識の不足、予習をする機会がなかったこともありあまり十分に授業に関する知識を得ることはできなかったが、人民大学の先生が一方的に解説をするだけという日本とあまり変わらない授業スタイル、平均的に日本人学生よりは真面目に授業を受ける中国人学生、授業の後には絶対に先生に対して拍手をする文化など、日中の大学の授業を比較できる非常に面白い機会だった。中国の学生に関して全体を通して思ったのは現在は中国人学生と日本人学生にそれほど大きな差異は無いということだ。つい二〇年ほど前であればほんの限られた一部の人がしか大学に進学できなかったのだから現在では日本より大学進学率は低いもののそれなりに大衆化している。また、ほぼ一〇〇パーセントの学生たちがスマートフォンを使い、パソコンを使ってノートを取ったり休暇中は国内外を旅行したりしているということを知ると少なくとも大学生

の間で日中の経済水準の格差はかなり小さいのではないかと思った。

加えて日本大使館の横井大使や北京戯曲評論学会の方々、中国を代表するメーカー企業の方々など一週間のうちに数えきれないほどの各分野の第一線で活躍する方と机一つ挟んだ近い距離でお話を伺えたのも自分の人生の中では大変貴重な経験だった。彼らのような地位にいる人と言葉を交わすことは学生が普通に生活をしていてはまず不可能であり、人生経験豊富な方々のお話を伺うのは本当に面白く楽しい時間であった。また、今回は上海や北京に留学中で現地から合流した東大生も多かったため、彼らの中国生活や中国に来る前後でどのような中国観が変わったかなどを聞くことができたのも大変刺激的だった。一方で自分の中国語力の低さのせいでお話の内容が完全には理解できなかったり、聞き取れても背景知識不足のせいで面白いポイントがよくわからないということが多々あったことは残念だった。単純に現地で学べばいいということではなく、学び取れることを最大化するには事前によく勉強しておくということが不可欠であることを痛感した。

このプログラムを通して中国語と中国文

化や社会のより深い理解のための勉強に対するモチベーションは確実に高まった。私は二年生時の南京大学サマースクールや十ヶ月の香港留学、二ヶ月の上海でのインターンを通じてそれなりに中国事情に精通してしたつもりであった。しかしこれらの都市はどれも南方に位置し政治よりは経済色の強い都市である。北京では街の雰囲気から人々の考え方や伝統文化まで趣が異なっていた。私は今までは日本または中国の他の都市の視点からしか北京を見ることしかできなかった。しかし今回は、深思北京の名の如く、中国の政治と文化の中心である北京からの視点で北京、そして中国を見つめなおすことができたという点で大変有意義だった。このような素晴らしいプログラムを用意してくださった刈間先生、奨学金を提供してくださったセンシヨールホールディングスの方々、北京戯曲評論学会の方々はじめ現地でお世話になった方々と引率してくださった朱さんにお礼を申し上げます。

中国の文化を形作るもの

佐々木智仁

中国の文化は古くからの伝統を継承し、

形式や格調の高さを維持する一方で、一般市民を含めた多くの人に受け入れられていくと感じた。中国の文化形成には、いわゆる文化人はもちろん、一般の人々も深く関わっていると思う。その二つの層が中国の文化形成にどのような影響を与えているかを、中国人の思想、観念に触れたいうえで、書道、戯曲という伝統文化を例にとつて考察してみたい。

中国人の根底にある

魯迅的なもの・孔子的なもの

まず、この二つの層について、中国人の中にある二つの価値観から考えてみたいと思う。人民大学での「魯迅遺産得几个问题」という魯迅と中国文化に関する講義の中で、魯迅と孔子という二人の思想家について、その奥にある価値観も取り上げら

れていた。

魯迅は伝統的な価値観を批判し、最も基層部分の階層「草根」に注目し、人間の個人としての重要性を目覚めさせた。つまり、一般大衆にあたる部分である。この時代には文語体を嫌い白話文学が提唱され、古い価値観への挑戦が行われ、老百姓も文化の中に取り込んでいくきっかけになった。

それと対比されるのが孔子に代表される儒教的な伝統的な価値観、制度、団体、国家を重んじる部分である。どちらかという

と伝統、形式を重んじるものである。この二つの側面が、中国の文化においても現れているのではないかと思う。伝統文化において、形式や格調はもちろん大変重視される。しかし、それだけではなく、その作品を作る人一人一人の個性というのも重要になってくる。

書道

徐玉良氏の書道に関する講義では、伝統文化における書道の性質をよく知ることができた。書道においても、伝統的な作風は継承されながらも、そのなかで作者それぞれの個性が発揮される。

当然ながら、書道においてまずは顔真卿

や王羲之といった大家の確固たる作風があり、その筆法、法度を忠実に学ぶことから始まる。誰の書を手本とするのかも非常に重要な問題である。

このように、書道は厳格な規則があり多様性が生まれにくいと思われるが、しかし、ここでもやはり人の個性も重視される。同じ人が書く文字でも、そのときにどのような心情だったかによっても作品には大きな違いが出る。穏やかな心情であったのか、激しい心情だったのかなどが、鏡のように紙の上にも表れてくる。そして、書く人それぞれの個性が最も重要である。書の中に滲み出る風格はその人物の苦勞、経験を反映する。これは学ぶことができないものである。

そして、この書道の豊かな伝統を培うものとして、その広範な普及性が挙げられていた。書道は筆と紙があれば簡単にできるため広いすそ野を持つ。実際、北京の後海の公園を歩いていたときも、一般の人が地面に筆と水で美しい作品を書いていた。このような普及性は二つのことを意味すると考えられ。まず一つ目は、多くの人が書道の基本技術に対して理解がある、つまり良い観賞の眼を持っているということであ

る。これは王羲之や顔真卿の時代から変わらぬものを今に伝える効果を持つ。もう一つは、すそ野が広いということは、それだけ様々な階層の人の風格、様々な経歴を反映される。このことが一種の刺激となり、洗練された多様性を生み出す力になっていくのではないか。

戯曲

戯曲についても、書道と同じことが言える。劇場に京劇を見に来る客の階層も様々であり、観劇の文化が根付いていると言える。基層の階級から、戯曲評論学会のような学術的な階層まで、広範な広がりがあり、絶えず厳格な目で見られているということが感じられる。実際、長安大劇場で戯曲を観賞した際には、様々な客層に親しまれていることに驚いた。

戯曲を生で見て感じたのはその魅力を十分に味わうには、知識、教養が必須であるということだ。自分たちはまだ素人なので、

何となくすごいものだということは分かるが、どの動き、どの台詞に特にすごさがあるのかということまでは難しい。しかし、北京の人たちはそれを見極める目を持っている。それが深い知識や教養から来るのか、

劇を見続ける中で感じ取った直観的なものは様々だろうが、伝統文化を創り出す土台が存在している。

戯曲の練習風景を見た際には、動き一つ一つのわずかな違いにもこだわっていたことが印象に残った。動作一つ一つにも厳しく目を向ける目の肥えた観客があつて完成度の高い演目が作られているということを感じた。

また、戯曲と歌舞伎はよく比較されるが、役者の養成課程に、その違いがうかがえる。歌舞伎の場合、血統はかなり厳格に重視され、梨園の一家に生まれたい限り、その道を志す者はほとんどいない。一方戯曲はそうではない。役者の養成学校には名家の出身者だけでなく、一般の家系から入学する人も多く、そこから一流の役者になることもできる。この点で歌舞伎よりも門戸が広いと言える。これもまた、多様性の幅を持たせることができる理由であると思う。

これらの伝統文化はもともと貴族文化、文人文化であり、どちらかという形式、内向きであるという性格を持ちがちである。しかし、書道や戯曲に代表されるように、中国文化は伝統的な形を維持しながら

らも、一般大衆にも広く受け入れられ、芸術家の個性を反映するものであるのだと感じた。

伝統を守ろうという力と、多くの人に受け入れられるということは、対立するものではなく、むしろ、多くの人に受け入れられるからこそ伝統が継承され、文化としても深みを持ったものになるのではないかと思う。



思
·
議
北
京



中国文化の多様性

—文化の変質とは何か—

黒岩広大

今回の北京研修は、私にとって非常に得難い経験だった。それは、私にとって中国の首都、北京を経験するのは一回目であり、さらに、北京戯曲評論学会の方々のような、教養の高い方々に同行していただいて、彼らの世界を見るというのは、初めての、そして、これまで想像のつかない体験だったからである。その意味だけでなく、私にとって深恩北京は非常に価値の高いものだったのだと考えられる。しかし、この価値の高さは、他の研修から私が受ける感覚とは少し異なっていた。七日間の研修を終え、日本の空港に帰ってきた際、私の胸裏に渦巻いていたのは、一週間の行程をすべて終えたのだという充実感のみではなく、北京で各種各様の中国文化に触れたことで浮かび上がってきた、中国文化に対する問題意識だった。私がこのように感じたのは、私が一週間で経験した世界が、私が想像していたものの範疇を大きく超えていたからであろう。この研修は私にとって、常に複雑な

感情、感覚と向き合いながら、北京という都市が持つ文化や、また北京の文化を愛する人々と真剣に関わりあわなければならぬものであった。当然、私たちが踏み入れた世界は、短い時間のみでは絶対にその奥までのぞき込むことなどできない、深く、豊潤な世界であった。しかし、すべてを取り入れることはできずとも、部分的にでも受容し、思考し、会得できたものはあるのではないかと考える。以下では、深恩北京で私が獲得した「北京に代表される中国文化」の断片を、「中国の多様性」というフレーミングで型取り、私なりに考察した結果を述べたいと思う。

さて、中国の多様性というのは、非常に語り難いテーマである。一つの考えをまとめるどころか、語り始めることすら難しいかもしれない。これは、中国が広大な土地、膨大な人口、そして悠久の歴史を持っていることに起因すると考えられる。土地が広ければ風土ごとの差異も大きく、人が多ければ価値観の幅も大きい。そして、歴史が長いということは、中国という国が蓄積してきた文化も、それに比例して莫大になるということである。中国の多様性は、あらゆる角度から、あらゆる深さで考えること

ができるものなのである。その中でも、文化の変質というのは、どのような角度から考察する際にも共通する、最も重要な契機の一つであることは間違いない。なぜなら、中国文化の変質とは、つまり、中国が何を保存したいと望み、何を受容したいと望んだか、あるいは、中国が何を残さざるを得なく、何を変えざるを得なかったのか、という質問に直結するからである。

いわば、上記の問いは「中国の考え方」を考察することにつながる。この考察こそ、中国がどのような価値観の総体なのかという問い、さらには、その価値観を作り出しているのは、どのような多様性なのかという問いにまでたどり着く。つまり、変化したものの、保存したものというのは、その国の多様性や価値観を探るうえで有用なパラメーターの一つなのである。以下では、中国の各種方面の内、深恩北京で体験した、北京の文化や社会について、考えを進める。具体的には中国北京文化の変質を例として挙げたときに、一つの疑問に直面する。変化し続けるのである中国文化において、変わらなかつたものとは何であるのか、そのようなものは本当に存在するのかという疑問である。例えば、北京の街並みについ

て、「老北京」と呼ばれるような古き良き中国の姿は、二〇〇八年北京オリンピックを境に、私たちが滞在していた付近周辺（護国寺）を除いて、ほとんど消え去ってしまったらしい。護国寺では、下町の風情あふれる街並みの中で、人々が生活を営んでいた。一方、北京の街の中では、各活動の移動の際、バス車内から見える北京の景色というのはほとんどが、銀行等の高層ビルや、高速道路の立体交差など、現代的な建築であった。現代化された街中を多くの車が走り抜ける、洗練された光景が広がっていた。このように、街の様子は、大きく変容したものになっているのである。また、中国の伝統文化の一つである京劇については、現在、現代人の感覚に合わせた新しい京劇というのが模索され始めているらしい。そして、中国人が人間関係の上で重視するとされている「人情」についても、人民大学で交流した学生や、北京戯曲評論学会の方々がおっしゃっていたところによれば、おそらく西洋の文化が一定の割合で国内へと入ってきた影響もあり、現在の年齢が若い人々は、そこまで「人情」というものを気にしなくなっているらしい。

以上の例はすべて、伝統が現代的なもの

に取って代わられているもの、つまりすでに変質してしまっただけのもの例である。しかし、このように考えてみると、変容しないものなど存在しないのではないかと思えてくる。悠久普遍の文化など存在せず、すべて時代に形を合わせて変わっていくのではないかという疑念が膨らんでいく。だが、ここには大きな瑕疵があるのだ。変わっているのは表層の一部分であって、その奥にある本質は決して変わってない。京劇、昆曲にしても、かねてからの伝統を、伝統のまま、誠実に学んでいる学生たちの姿を、私たちは京劇院で見取ることができた。なにより、北京戯曲評論学会の方々は、古くから伝わる本質といえる部分を愛し、鑑賞し、継承したいと考えておられた。戯曲、小説、書道など、どの分野に対しても、彼らは古いものにだけとらわれるのではなく、新しく入ってくる、または、形を変え始める文化にも目を向けながら、伝統を放棄する姿勢は全くなかった。そうして残っていく伝統こそ、文化において、変わっていないと言って良い部分なのではないか。それを一番強く感じたのは人民中国雑誌社を見学し、編集長のお話を伺った時である。長い歴史を持つ人民中国という雑誌も、時

代を経れば、その流れに従って取り上げられる内容も変わっていく。実際私たちが頂いた人民中国の特集も、アニメやマンガ、ゲームを取り上げたページや、現代ならではの社会問題を取り上げたページが多々存在した。しかし、伝えたいもの自体が変わっているわけではないのだと私は思う。日本と中国の交流のために、中国と日本の交流について、中国の人々の何気ない日常に密着した部分について、それぞれを魅力的に描き、伝えようとする姿勢は、おそらく、受け継がれてきたものなのであるかと考えられ、さらには、これからも受け継がれていくものなのであるかと考える。そこにこそ、中国の人々の生活の息遣いと、人民中国の編集部の方々の思いが凝縮されているのではないかと私は感じた。

確かに中国文化の表面上は多様化が激しく、それが中国文化それ自身を鮮やかに彩っている。しかし、表層の奥には、よりまとまった、古来より保存されてきたものが隠れているのだと、私は強く感じた。

深思北京

湯川利和

中国の多様性 変わるものと変わらないもの

中国の多様性。これは自分が特に中国に留学に来てから意識し続けていることの一つである。多様性と聞いたとき、自分が最初に思い付くのは空間軸でとらえたときの中国の多様性である。つまり、地域によってまとう雰囲気が大きく異なるということである。今回のプログラムを通じて、北京の持つ伝統文化の深さに気づかされた。少なくとも自分の両親の出身地の上海とは文化は大きく異なっていると思う。

多様性と聞いてもう一つ思いつくのは時間軸でとらえたときの中国の多様性である。つまりは時代ごとに中国は姿を変えてきたということである。今回のレポートのテーマが「変わるものと変わらないもの」であることを踏まえ、こちらに重点を置いて書いていきたい。自分は変わらないものは歴史であり、変わるはその解釈なのではないかと思う。そしてある物事の解釈の潮流が文化であるともいえるだろう。今回

のプログラムの中で鑑賞した映画「启功」の主人公は、人生の中で中華民国建国から日中戦争、中華人民共和国建国、文化大革命とその収束まで多くの節目を経験したわけだが、その中で中国は大きく変化した。特に文化大革命は政治が人々の考え方に影響を与えた例と言える。启功が文革時に紅衛兵に自宅を調べられ肩身の狭い思いをしていたが、その後かつての紅衛兵の一人が启功に師事するという変化は人々の考えの変化を端的に表しているといえるだろう。個人的には中国で文化大革命を扱うことがタブーとされているのではないかと思っていたので、この映画が放映されたこと自体に驚きを覚えた。

ここ十年間の中国の発展を受け、中国に対する中国国民の認識・そして海外の人々の認識も大きく変わっている。その際メディアが人々に与える影響も無視できないだろう。今回訪問した人民日報は国内にとどまらず海外への情報発信にも力を入れており、これは海外における中国に対する認識を重要視している証左ともいえる。横井大使も日本外交における中国の影響はとても大きいと仰っていたことが印象的であった。経済発展を経て、中国で環境保護意識

が高まっているのも一つの大きな変化である。

このように、中国は広大な国土を持ち、それぞれの地方で異なる特色を持っている上、時代によって人々の考え方も異なっているように感じられる。さらに今回は文化に重点を置いていたが、中国をどの角度から分析するかによっても得られる中国像は大きく変わってくるだろう。中国はとても多くの要素を内包していると言える。紡がれてきた歴史は不変だが、その解釈は変わっていくだろう。そのため、今自分が理解している中国像はあくまで一面だと認識し、様々な人が物事を通して中国を理解し続ける努力をすることが重要だと痛感した。

中国の公式活動を通しての感想

今回のプログラムでは、政治・経済・文化それぞれの面から中国・北京を捉えることができたと思う。

特に中国の文化に対する自分の無知を痛感した一週間だった。伝統文化・文学・食文化など幅広い文化に触れ、このプログラムでかなり中国の文化について考えさせられた。文化という概念の中には様々な要素が包摂されており、捉えどころがないから

こそ、学ぶ姿勢を持ち続けることが重要だと感じた。

以前から自分は、文化とはただ消費されるものではなく、理解すべきものという考えがあった。物事の背景を理解したうえで鑑賞するように心がけていた。しかし物事を深く理解することは簡単ではなく、日本文化でさえ表面的な理解に留まることも多々あった。

日本で生まれ育った自分は日本の文化の影響を強く受けてきたながら、外国の文化に触れる機会が少なかつたこともあり、日本の文化をいわば当然視してしまい、表面的な理解のみで思考停止に陥ってしまった。しかし、今回のプログラムで中国の伝統文化に触れたことで中国との比較で日本の伝統文化について考える機会があった。

今回のプログラムを通じて感じたことが二つある。一つ目は伝統文化を理解することとは想像以上に難しいということだ。ある寺の壁画を鑑賞した際には、説明して頂いて初めて絵の解釈や描き方を理解することができた。また今回京劇を初めて鑑賞したが、言葉、声調、動作、間一つ一つに意味があるのではないかと感じた。書法についての説明の際にも奥深さを感じた。こうし

た背景に対する理解がなく鑑賞したところで文化の理解には程遠いだろう。そして、文化を深く理解している人がどれだけののか考えさせられた。改めて振り返ってみると、自分も日本の伝統芸能をほとんど理解していないのだが、その理由の一つは文化の商業化が進んだことにあるのではないかと思う。人々にわかりやすく伝えるために文化は単純化され、複雑な要素を持つ文化は敬遠されるようになったのではないか。特に若い人はすぐに鑑賞できるものを求め、伝統芸能を理解する人はますます減っている印象を持つ。今回京劇の観客に若い人々が少なかつた印象を持ったが、これは日中共通の傾向かもしれない。だからこそ文化を理解している人を探し、その人から話を聞くのが重要なのだと思う。そして、人々の側が主体的に伝統文化を理解しようとしていないことも問題だが、人々に伝統文化の理解を促す機会が少ないことも問題だと考える。例えば小学校や中学校で日本の伝統文化について教える授業があってもよいのではないかと考える。その授業を経て関心を持つ人も少なくないのではないか。

二つ目は人脈の重要性と中国の方の温か

さである。今回お会いした方々はそう簡単にお会いできない方ばかりであった。自分たちは一介の学生にも関わらずとても良くしてくれた。刈間先生や横井大使ともに人を見る目が重要と仰っており、刈間先生は日本と中国で友人との付き合い方も異なるとも仰っていた。自分も中国に留学している約三か月の中で中国の方の温かさに触れてきた。その中で個人的に感じるのは、中国人にとって友達の友達は友達であり、友達に対してとても親切である、ということである。日本であれば友達の友達といえども距離感は遠いように感じる。

最後にこのような得難い機会を提供して下さったすべての皆様に謝意を表したい。今回のプログラム中自分の言語能力の低さを非常にもどかしく思ったので、一層中国語能力の向上に邁進していきたい。そして文化の奥深さにも注意を払っていきたい。ここでの出会いを将来につなげられるかどうかは自分の努力次第だと認識しているので、努力していきたい。

「文化」を理解するとは

縫部瑞貴

私は交換留学の制度を利用して今年の6月から北京大学に留学している。大学の授業期間中ではあるが、特別に部分的に参加できるように取り計らっていただいた。

私は大学一・二年時に、「EIP（トライリンガル・プログラム）」に一期生として参加しており、二年の夏には南京大学でのマースクールに行かせていただいた。この南京で孫文の陵墓（中山陵）や長江、南京大虐殺記念館などを自分の目で見学し、中国という国の地理的・歴史的なスケールの大きさを知った。一方で拙い中国語を用いて中国の市井の人々と交流する機会もあり、それまではニュースでしか聞き取ることができなかった「中国人」の印象が多少なりとも変化した。サマースクールの後、実は中国語の勉強は少しサボリ気味になっってしまったのであるが、国際関係論という専門に進み、国際政治や国際法の勉強をするにつれて、国際社会におけるアクターとしての中国に注目する機会が多くなった。「ニュース」や「中国人との対話」に加え

て「国際関係論」というひとつ目のツールを手に入れたのである。その中で外交官になりたいという志をも持つようになり、日中関係の諸課題に関する問題意識を強く持つようになった。

しかしその一方で、勉強を進めるにつれて私は、中国に対する見方が「国際関係論」のメガネに規定されすぎている、そしてせっかく習った中国語が、対中国認識を形成する際に役に立てられていないという自覚を持つに至った。中国人の考え方をいま一度深く理解したいという思いから、卒業を遅らせて一年間の交換留学に行くことを決めた。現在は、留学生向けに中国語教育を実施している「対外漢語教育学院」で語学の授業を受けており、来学期は中国人学生と一緒に国際関係の授業を受ける予定である。

このように振り返ると、「南京」「東京」「北京」それぞれの都市での経験は私の中でつながっていると見える。ただ、この北京という街で留学をしても、基本的には大学の周辺で毎日の生活を送るため、なかなか北京という都市について「深く思考する」機会はない。大学のキャンパスを離れて参加した今回のプログラムは、私の北京での

体験に新たな視点を与えてくれるものだった。

公式活動を通しての感想

私が授業の合間を縫って参加したのは、十一月十四日（月）の人民中国雑誌社・中山堂訪問、十五日の京劇練習場・京劇学校の訪問や、十八日（金）の日本大使館訪問等である。以下、簡単に各行程を振り返る。

人民中国雑誌社訪問

人民中国雑誌社は、國務院直属で中国の対外宣伝を担う中国外文局が擁する雑誌社の一つである。日本向けに月刊誌『人民中国』を発行しており、これは日本政府の対中政策を担う人々や、中国でビジネスを展開する人々に愛読されている雑誌である。私たちは編集長の王さんと会談し、出版社の歴史や紙面に関する説明を受けた。恥ずかしながら中身をしっかりと見るのは初めてだったのだが、中国政府の動向や経済情勢の他、日中交流の様子、中国の観光地の案内、中国の少数民族の紹介や中国の楽曲の日本語訳など多種多様な情報で埋め尽くされていて、大変興味深かった。この紙面を見るだけでは、政府と距離を保ち、日

本側の視点等も取り入れながら編集されているように見える。しかし江沢民や胡锦涛などの歴代首席が雑誌社を訪問している写真などを目にすると、やはり共産党の強い意向が紙面に反映されていることはたしかであり、字面の裏にあるものを読み取ることの必要性を感じる。ただそれでもなお、日中国民がこのような雑誌を通じて互いの国を知ることの意義は薄れないであろうし、王さんが再三強調していたのも、国民レベルでの相互理解の重要性であった。

中山堂訪問

中山堂は、普段見学できない建物であるが、今回特別に見学をお許しいただいた。その後、監事長の徐さんに、中国の伝統文化についての講義を受けた。特に書法についての講義が面白かった。中国の書法は、自ら師と定めた書家の字を模倣することから始まること。筆の運び方や全体のバランス・色の濃淡などとともに、精神の境地が字と一致することが必要なことを聞いて、初めて書法を「習字」ではなく、「文化」の一つとして理解することができた。書法が象徴する漢字文化の精神は、中国絵画や音楽、はては中国人の心性にまで反映され

ているという。この話を聞いてから私は、中国には「漢字しかない」こと、逆に日本には「カナがある」こと、この違いが中国語と日本語の聞こえ方にもたらす違いなどを考えるようになった（結論らしいものはまだ出ていない）。

京劇見学

京劇の練習場と学校を訪問した。どちらも、普通は一般の人が絶対に見学することはできない場所である。練習場では京劇の女優が崑曲の先生に所作を指導してもらっているのを見学し、京劇学校（中学・高校・大学とある）では、子供が京劇のアクションや発声の練習をしているのを見せていただいた。

私は、ベネチア国際映画祭で最優秀賞を受賞した「霸王別姫」という映画を、プログラムの一週間前にちょうど鑑賞していた。この映画は、京劇学校に入学した二人の子供が厳しい修練を経て男役と女役として大成しながらも、日中戦争・国共内戦・文化大革命と続く時代の奔流と、京劇の演目さながらの複雑な人間関係に翻弄されていく、というという物語である。私は映画を見てすぐに、京劇の世界の華やかさに魅

了されてしまった。一方でこの映画の序盤では、京劇の学校での残酷な指導風景が描かれており、京劇の世界の厳しさに面食らった。現代の京劇学校では幸いそのような指導は行われていなかったが、若いうちから京劇役者を夢見るものたちがその世界の門をたたき、無心に練習に励む姿は映画の中と同じであり、昔も今も変わらない形で継承されている文化がそこに確かにあると感じた。

併設の京劇博物館で京劇の衣装や小道具の展示、京劇の歴史の解説などを見ているうちに、私はすっかり京劇ファンになってしまった。京劇は歌・踊り・演技・武術・音楽などの要素から構成される総合芸術であり、周到な準備の上に成り立っている複雑な芸術なのである。また刈間先生に、梅蘭芳の一家が中国の政治に影響力を行使してきたというお話をお聞きし、権力者をも魅了する京劇の裏の顔にも好奇心をそそられた。

大使館訪問

日本大使館を訪問し、最初に大使館の概要に関する簡単な説明を受けたあと、横井大使とお話をさせていただいた。横井大使

は大変気さくに、率直に我々にお話をしていただき、外交官志望の私にとっては、とても贅沢なひとときとなった。

対中外交というところでも政治面に注目しがちであるが、横井大使は経済・文化外交の重要性を強調していた。経済面で言うところ、例えば日中国交正常化の前にも「『貿易』や『友好商社』など長い民間経済交流の歴史があり、ここで作られた太いパイプが政治面での大転換を後押ししたのである。そして北京で今回触れた京劇・崑劇や日本の歌舞伎などの伝統文化（2008年には坂東玉三郎が蘇州で崑劇の公演を行った）、日中双方のポップカルチャー（このレポートを書いている現在、『君の名は。』が中国で大ヒットしている）、観光客の往来などが人心を動かし、両国間の関係を改善していくことがあるのだ。

そしてそのような状況を踏まえて、大使が「日中関係はよくなつていく」と強い言葉でおっしゃったのが最も印象的であった。大使が外交官として日々の積み重ねを怠らず、時には困難だと思われることにも思い切つて挑戦をすることで、実際に日中関係をよい方向に導いてきたからこそ、その言葉に説得力があるのだと思う。私も日

中双方の政治・経済・文化に対する幅広い理解を深め、人間力を涵養することで、よりよい日中関係を築くための一ピースとして貢献したいと強く願う。

中国の多様性

変わるもの・変わらないもの

中国という国には、日本と比べ物にならない多様性・多面性がある。大都市と農村、沿岸部と内陸部、冷帯と温帯と熱帯、漢民族とその他の少数民族、共産党員と庶民など、中国国民を隔てる「線」を数え上げればキリがない。そして中国の首都である北京には各地方から様々な背景を持った人々が集まってくる。例えば食事ひとつをとっても、何が北京料理の特徴なのかわからなくなるくらい実に様々な味が混じり合つて、北京料理と呼ばれる曖昧な一群を構成している。北京は中国の「政治」「経済」「文化」などの中心であり、実に多面的で重層的な都市である。今回の訪問は、「政治」「経済」という側面よりも「文化」という側面に焦点が当てられており、文化面で中国・北京を理解することの大切さを学んだ。私が今まで見聞きしていた中国は、国際政治における中国であったり、世界経済におけ

る中国であったりして、中国の歴史・伝統文化にそれらに関連付けて捉えることができなかつた。プログラムを終えて「政治」と「文化」の関係について思い至つたことが3点ある。

第一に、中国の政治エリートは中国文化に対する造詣が深いのみならず、しばしば文化を政治的資源とすることがある、ということだ。『人民中国』の編集長、中山堂の董事長はいずれも共産党の重鎮であるとうかがつたし、人民中国雑誌社と歴代首席の距離の近さ、京劇と政治の世界の密接な関係などを見ても、中国のエリートは日本に比して、より文化的なものを重んじる傾向にあるようだ。歴史を顧みても、五四運動の背景に胡適や陳独秀らが推進した白話運動の精神があつたこと、そして政治運動の呼称としての「文化大革命」にその傾向を見て取れるだろう。

第二に、文化外交の重要性である。これは上述したように、主に大使館訪問で感じたことだ。中国のエリートが文化に造詣が深いからこそ、日本も日中間の「政治」を動かしていくための梃子として、「文化」を活用できるはずである。そしてこれはエリートのみならず、多様性のある中国の大

衆に直接働きかける最も有効なアプローチである。中国はいまや世界一ネット社会の発達した国と言われ、大都市と農村、エリートと庶民といった違いを超えて誰でもネットを用いて生活している。アニメ・ドラマなどのコンテンツのみならず、日本の伝統文化や観光情報、さらには政治的主張なども伝えていくことで確実に日中関係にプラスの影響をもたらすことができる、そのような時代になっていいると感じる。結果として日本に実際に赴き、その目で日本を見て、日本人と接してくれる中国人が増えればなおよいことだ。

第三に、これは直感にすぎないのだが、中国人に根付いている思考の習慣・方法が、政治面での行動を規定することがあるのではないか、ということ。例えば外交面で中国が長年掲げてきたスローガンとして「韜光養晦・有所作為」というものがある。日本人の感覚では、いかにも堅苦しく、難しく、大袈裟なスローガンである。しかし中国文化が「漢字（に縛られた）文化」であるということ、成語の多さや街中の標語の数に見取れるように「言葉の格式を尊重する文化」であるということ、四書五経の解釈学の発達などに見取れるように「抽

象的な言葉に複雑な解釈を忍ばせる文化」などを理解すると、幾分すんなり受け入れられる。いかに時代が流れ、政治や経済の状況に変化が生じてても、それらを規定する「文化」の部分は、中国人の心性に深く根付いていて、容易に変化しないのではないだろうか。

中国に留学をしていて感じるのは、中国人の日本に対する理解は着実に深まってきているということである。歴史問題・領土問題に起因する反日感情を持ちながらも、一方で日本のアニメ・映画・音楽・旅行などを通して、異なる角度から日本を捉える機会が増えてきている。一方日本人の中国に対するイメージはどうだろうか。政治面でのいざこざ、爆買い、街中でのマナーの悪さなど、表面的な事象に関する言説だけが蔓延し、その言説に翻弄されてはいないだろうか。時代が流れても直ちには変化しない、中国人の「文化」の奥深さ・多様さを、理解しようとする試みが足りていないように感じるのだ。中国への旅行者の少なさ、中国への日本人留学生の少なさにもそれは反映されていると思う。

人民中国雑誌社で感じたのは、中国の側が、中国の多様なイメージを日本に伝えよ

うと試みているということである。中国からのこの発信に対して日本が呼応し、より中国を深く、多様な側面から理解することで、日中関係の可能性は広がっていくはずだ。地に足の着いた中国観を築き、それを活用していくという地道な作業によってこそ、中国という国家に対峙していくことができるはずである。自分の目と耳で中国・中国人を感じられる留学生であるからこそ、中国人の「文化」を理解することに努め、この作業に加わっていききたい。

言葉の用法と習慣からみる 中国人の価値観

佐藤雅士

私は現在北京大学に半年間の交換留学にきている。今回はTTPの一期生として、特別に現地から部分的に本プログラムに参加させていただいた。



領土問題や内政事情が軋轢を生み、なかなか距離が縮まらない日中関係。所得の増加に伴い年々拡大する訪日中国人観光客。これらの影響もあり、最近では日本国内においても、メディアや観光客との交流を通じて情報が流入し、無意識に人々の中に中国人に対するイメージが形成されていく。そして、一般的に日本人がもつ中国人に対するイメージは「マナーが悪い」「自己中心的」など、ネガティブなものが多いように思える。

私が中国への留学を決意したのは私の母が台湾人、しかもいわゆる「本省人」であったためである。台湾に帰国するたびに「大陸人とは結婚するな」と親戚から念押しされ、日本ではニュース番組で中国に関するニュースが流れるたびに母から「大陸」に対する不満や批判を聞かされていた。このような環境で育った私は幼いころから自分の身の周りの人々が中国に抱くネガティブなイメージに違和感を抱いていた。私は自分の目で中国という国と人々を見ることでこの違和感を払拭しようとする母の反対を押し切って留学先を北京大学にした。

実際に中国にきてみて、自分の違和感が正しかったこと、つまり先に述べたような

イメージがいかに表層的であるかを痛感した。それと同時に北京での生活を通して中国人に対する正しい理解を深めたいという気持ちが強まった。

本プログラムへ参加した時間が短かったため、以下留学期間中の活動から得た学びも含めて述べていく。

「面子」から「里子」へ――価値観の変化

北京大学の中国語の先生によると「中国人の価値観、文化は日常会話や習慣など生活のいたるところに表れている」らしい。例えば「马上」という言葉は口語的表現で「すぐに」という意味をもつが、書面語で同じ意味をもつ「立刻」「顿时」とはニュアンスが異なる。「我马上就会到了。」この時の「すぐ」が指す時間の幅は話し手によって変わる。中国人がこの言葉を日常的表現として常用するのは、確実な表現をせずに幅をもたせることによって何かあったときに相手の信用を損なうことを避けるためだという。

食事の場においても中国人らしさを垣間見ることが出来る。中国では「请客」の文化が特に強く、おまけに注文する食事の量が明らかに人の数と釣り合っていない場合が

ほとんどである。食事の終盤で人数が増え
ても、躊躇なく料理を追加し、残してしまっ
ても気にしない。むしろきれいに食べきる
とさらに注文しようとするほどである。私
が本プログラムの大使館訪問前の昼食に途
中参加した際も、卓上の余った料理で十分
であったにもかかわらず追加でレストラン
名物の小籠包を注文していただいた。

台湾大学心理学教授の黄光国は著作《人
情与面子》の中で「面子」が中国人の日常
生活と人的交流における基本概念である、
と述べている。上述した二つの例から私は
「面子」と人々の言葉の使い方や習慣が密
接に関係していることに気づいた。「面子
を保つ」ために明確な表現を避け、自分の
「面子をたてる」ために食事の場で大盤振
る舞いをする。つまり中国では所謂「面子」
が人の判断基準になつていているため、人々は
常に「面子」を気にして行動するようになって
いたのではないだろうか。

もちろんありとあらゆる状況において
「面子」を重んじているというわけではな
い。本プログラムでの食事の例を挙げたが、
今回食事を用意してくださった北京戯曲評
論学会や訪問先企業の方々は純粋に刈間先
生をはじめ、本プログラムの参加者を手厚

くもてなす一心でたくさん料理を用意し
てくださったはずだ。しかし中国において
は「面子」が重視されるという文化が昔か
ら人々の行動を左右してきた。その結果「面
子」を立てるためではなくても、習慣化さ
れた行動として無意識に大量の料理を用意
した、と考えることができる。「馬上」の
例においても同様に、明確な時間の指定を
避け、万が一の際に面子を守るために使わ
れてきた表現が、現代においては話し手の
意図にかかわらず常用句として定着したと
考えることができる。

しかし言葉の用法や習慣が根付いていく
一方で、グローバル化による社会
の多様化とともに「面子」を重視する価
値観も少しずつ変化しているように思え
る。現在北京大学には世界各国からきた
七〇〇〇名以上の外国人学生が在籍し、北
京市内には十万人以上の外国人が滞在して
いる(『中国版』)。中国の人々が多様な価
値観を受容していく過程の中で、「面子」
体面」のみでなく「里子」すなわち内面的、
精神的満足も重視するようになっていく。
この傾向は消費者の嗜好から読み取ること
ができる。

先日内定先であるトヨタ自動車の中国統

括会社を訪問させていただいた際に、中
国ではサイズとデザイン性を兼ね備えた
SUVの売り上げが伸びている一方で、EV
などのエコカーにも注目が集まっている、
という話を聞いた。また競合他社でEVを
専門的に生産している米国テスラ・モ
ーターズのCEOイーロン・マスクも中国に
おけるEVの市場性を指摘している。この
EVへの注目は、消費者が環境への配慮と
いう社会貢献を通じて精神的充足感を得て
いるとすると従来の「面子」意識ではなく
より「里子」を重視した消費者の傾向と捉
えることができるのではないだろうか。本
プログラム中に訪問した愛慕集団も消費者
の嗜好が従来の欧米ブランド志向から高品
質あるいは国産志向にシフトし、愛慕製品
が消費者の新たなニーズに込めることがで
きたために、近年の業績の向上とビジネス
の拡大を享受することができたと考えられ
る。

「馬上」の用法や「請客」の習慣は、中
国人が持つていた「面子」を重んじる心性
に由来するものであると考えられる。現代
でもこれらの用法・習慣は形を変えずに
残っているように見えるが、一方でそれを
生み出した中国人の心性は確実に変化して

いる。

中国社会はいままさに過渡期にさしかかっている。グローバルゼーションと多様化の中で、一体なにが変わっていき、なにが変わらないのか。今後も中国の動向に注目していきたい。

九月からの留学生生活と本プログラムの経験からわかったことは、中国という国がものすごいスピードで変化していること、そして「日本と中国は思ったより近い」ということである。北京京劇院では梅蘭芳の生涯をたどる中で、梅蘭芳が日本の歌舞伎に影響をうけ京劇の近代化を進めたこと、そして京劇を通じた文化交流が国交正常化以前から行われていたことを学んだ。そして日本大使館を訪問した際には横井大使からアニメや音楽といった日本のポップカルチャーが日本と中国をつなぐ架け橋になっているというお話をうかがった。日本のアニメや音楽の人気は私自身が北京大学で現地の大学生と話すたびに感じていたことでもあったが、外交の最前線にたつ横井大使が熱心に文化交流の重要性を語る姿がとても印象に残っている。

だが一方で、この「思ったより近い」距

離は一定ではなく、放っておけば縮まるものでもない。国の発展に合わせて人々の価値観や文化は絶えず変化していくため、この距離は各国の状況に合わせて縮まることもあれば離れることもある。相手国がおかれている状況、人々の価値観や文化を正しく理解し、変化を捉えること。そして相手の自国に対する考えやイメージを踏まえたうえで、自国に対する正しい理解を深めてもらえるように情報発信や交流を積極的に、地道に行っていくこと。この二点こそが、私は国際関係を考えていくうえで重要なのではないだろうか、という気づきを得られたことが一番の収穫である。



中国の発展に伴う

日中関係の変化

吉武 成

日本において「急速な発展を遂げている」と言う表現で中国を表象しているのをよく目にする。しかしそれがいかほどのものであるのかという実感はなかなか湧かないであろう。本研修を通してその実態を垣間見て、率直に日本にとっての中国という国家の存在が今後大きくなるだろうと確信した。これについて以下に対中貿易、情報技術、文化理解の三つを例にとってみていく。

中国は世界最大の人口を有する大国であり、経済規模も年々増大している。今後中国マーケットに参入する外資系企業は増え、諸外国の対中貿易は今後一層重要となるに違いない。以前の先進国家は発展途上の中国を、言い方は悪いがいささか見下して取引していたのではないか。しかし、現在の彼らの経済力とそれに起因する影響力を軽く見積もるところが痛手を負うことは免れず、対等に接する必要がある。先進

国企業は与える立場ではなく、取引において自らを積極的に売り込まないといけないということである。この時、取引相手の言葉すなわち普通話が話せたら非常に有利であろう。中国人は人情に厚い人々であるということを学んだことがあるが、中国人と接する中でこれは実感している。日本語の人情とはいささか意味が異なるようだが、彼らは知人に対して非常に情に厚い。日本人が時折中国人を冷たいと形容してしまうのは彼らの交流関係外の人への接し方を見てそう感じるのだろう。中国人との間に人情の関係を構築できたらこれほど有効で信頼できるものはなかなかないが、彼らの言葉を喋れることは距離を縮めるにあたりかなり有利に働くのではないか。人情というのは個人個人の信頼の上に生まれるものであり、その際に言葉の壁はやはり大きな障害となる。通訳または英語を用いることで意思疎通を図ることはできるが、考えをニュアンスに至るまで表現することはできず打ち解けにくいであろう。さらには、取引に置いて損益の評価は極めて重要である。中国側の状況を評価するに、現地の言葉で語られる報道などに基づき的確な判断を行わなければならない。このように、世

界各国の対中取引において中国語の重要性は増すだろう。今後の日本においても、中国を客観的に評価するだけの「知中派」と、中国話者が重要となるであろう。

また、中国国内では貧富の差が大きい。一億総中流社会と言われる日本とは対照的に、現代中国においては中所得者が少なく高低所得者が多いという非常に厳しい格差社会となっている。それゆえ生活水準も自ずと多様なものとなる。都市部の特に豊かな者は先進国の富裕層並みかそれ以上の生活を手に入れ、農村部の貧困を極めるものは最低限の衣食住にさえ難儀する。一方で、中国に行き、まず感じるのは情報技術の普及程度の甚だしさである。例として微信という日本でいうLineのようなアプリがある。今回の研修中に幾度か「微信改良了中国（微信が中国を変えた）」という言葉を目にしたがその用途は実に多様である。メッセージを送信するだけでなく新聞を読んだり近況を発信したり、電子マネー支払いを行うこともできる。さらにはタクシーを呼ぶアプリ、自転車乗り捨て用アプリ、何でも宅配サービスアプリなど非常に多くのスマートフォン向けアプリが普及している。スマートフォンさえあれば生活

できるが、なければ地獄である、というようにスマートフォンを通して非常にネット社会化が進んでいる。また、インターネット上でのみ放映する映画も流行っており、制作費が安価で手頃なためより多くの人に表現する機会が与えられ、以前の映画界の常識が覆されつつある。インターネットは貧富の差関係なく誰しもがアクセスし、情報を得て、発信できる場である。近い将来、この情報技術を用いて、あるいはインターネットビジネスで貧富の差を覆すものが増加するのではないかと予想する。すなわち、

経済格差は固定されておらず、変わりゆくものだろう。新しい需要を見つけて、ビジネスを展開するというのは中国人の長所だと感じる。競争の激しい社会だからこそ必死になって知恵を絞り、実行に移すという国民性も変わらないものだろう。中国の情報技術やインターネットビジネスが今後発展を遂げるのはほぼ確実である。ここで日本も危機感を抱かなければ取り残され、国際競争力の低下にまで繋がる。日本は往々にして欧米にばかり目を向けがちである。しかし、特に情報技術関連における中国の発展は欧米をも凌ぐ勢いを持つ。それがいかほどのものであるか、これまた客観的に

評価し、学ぶべきものは学び、ライバルとして正當に意識した上で日本にもさらなる発展を目指して欲しい。

これまで対中貿易、情報技術の側面から中国を対等な競争相手として意識する必要性を述べた。その為にはまず中国に親しみを感ずることが第一歩であり、これには民間での文化理解が有効であると考えられる。数年前の反日感情高まりの報道が影響してか、中国を恐れ、友好的な感情を持たない日本人が多いように感じる。これはおそらく無関心ひいては無知が大きな原因であると感ずる。実際、中国の若年層は幼少期より日本のテレビ番組をはじめとした文化に触れ、日本に対して非常に関心を持っているということを本研修中に何人もから教えられた。今までもこのようなことを耳にしていたが、私たち日本人と積極的に交流したいと考えるような中国人が日本好きであることは自然だと考えていた。しかし、これほどまでに様々な場面で多くの人から聞くこと、一般の若年層に対しても確かに言えることなのかもしれないと思えてきた。これは非常に喜ばしいことであり、将来的に日中関係がより深まると期待できるものの、中国側がますます親日となることを待

つだけでは危ういのではないか。中国の国際社会における影響力も軽視できず、上で述べた通り日本側も積極的に中国を知る者を増やす必要がある。そもそも中国側が一方的に日本に対して好感を持つても、果たして両国の絆は本当に深まるのだろうか。経済発展とともに中国の若年層の考え方は西洋化していて、価値観の違いはあれど基本的な考え方は我々とそこまで変わらない。このことを多くの日本人は意外と知らないのではないか。このような現代の中国人の本当の様子というものを知れば中国がより身近な存在に思えるだろう。私自身、中国の特に若年層における親日の風潮を知るまでに長くかかり、この理解を広めるのは容易で無いこともわかる。しかし、無関心によって避けられる敵対心が生まれてしまふのは非常に残念である。中国の多様な文化が日本人に広まれば、中国に親しみを持つものが増え、両国の未来は真に明るいものとなるだろう。微力ながら、私もその一助になりたいと思う。そこで、自身自身の中国文化に対する理解を深めるところから始める決意をしたが、自らの日本文化への理解、ひいては教養を深めることの必要性も同時に感じた。例えば、他国の人

と文化を語るに他文化との比較は常套手段であり、興味深い視点でもある。しかし、自身の日本文化に関する理解が不足していれば他人に多くを語ることはできない。愛すべき日本文化に対する理解を深めることは、広義の教養にも含まれるだろう。本研修では中国文化に多く触れる機会をいただき、各分野に造詣の深い方々に手ほどきを受けた。彼らの説明はどれも特定の分野にとどまらない幅広く豊かな教養の元に成り立っていることを痛感した。文化とはある社会を生きる人々によって形づけられ、継承されゆくものである。平たく社会の仕組みに関する理解とも言える教養と文化への理解が深く結びついていることは必然なのである。

以上、対中貿易と情報技術を例に日本にとつて、急速な発展を遂げる中国がいかに重要な存在であるかをみてきた。日本が今後さらなる発展を目指すには、中国と対等に接し、競争相手として念頭に置かなければならない。中国に対して無関心な日本人がまだまだ多い中、まずは文化理解から始めるのが得策である。日本人が自国の歴史を含む自らの教養を深めると同時に、文化に始まる中国事情に関心をもって知る努

力をすることは、今後日本が中国とともに発展していく上で重要となるだろう。

最後になるが、本研修は実に実り多いものであった。多くのことを見て、聞いて、考えた。非常に濃密な時間であった分、感じて、得たことを整理、消化するには長かかるだろう。ただ、大変有意義な経験であり、今後の自身の考え方が影響を受けたことには違いない。本研修の実現のためにご尽力いただいたすべての方々的好意に心より感謝する。

「『君の名は』が大好き！」

その言葉に応えたい

山本さゆり

北京研修四日目、人民大学の学生との交流の際、私は初めて大ヒットの日本映画「君の名は」を見ました。中国でも「君の名は」の人気はすさまじいものでした。中国の検



索エンジン「百度」に連日掲載される「君

の名は」関連の記事、SNS「we chat」の

タイムラインに溢れる「『君の名は』を見

てきました」報告。上海に留学している私

は中国で話題になっていて初めて映画の存

在を知ったほどでした。「君の名は」の日

本公開は十月、中国での公開は十二月。「君

の名は」にとどまらず、現在中国では日本

のドラマ、アニメ、小説など最新のエンター

テイメントがほぼリアルタイムで輸入され

ています。中国では「日本文化」は既にメ

ジャーなジャンルとして成立しており、研

修中にお会いした方々、そして留学先の復

旦大学の友人など、老若男女問わず多くの

中国人が、私が日本人とわかると日本旅行

の経験や好きな日本小説・アニメなどの話

を披露してくれます。そういう時、私は嬉

しいと同時に申し訳ない気持ちにもなりま

す。私は好きな中国文化を答えられないの

です。中国で人気のエンターテイメント・

観光地などを私はほとんど知りません。留

学して初めて色々見るようになりました。

それはもちろん私のアンテナが低かったの

も原因です。しかし、見方を変えるとアン

テナを高く張らなければそういった情報が

入ってこない、日本は今そういう状況とも

言えるのではないのでしょうか。

日本にいたころ、私は中国について詳し

く知っていると思いついていました。日本

や欧米メディアの報道やインターネットの

記事を通して中国をテーマにしたものをよ

く読んでいたからです。しかし、「報道さ

れていない事柄」、研修を終えてこの多さ

を強く感じるとともに、それによって日本

での中国の印象が歪んでしまっているの

はないかと感じます。まず、日本のメデ

ィアに多く取り上げられる分野内での「報道

されていない事柄」です。一つ目は環境汚

染です。日本のメディアは連日スモッグに

覆われる北京とマスク姿の市民、そして健

康被害を報じています。今回私の実感とし

ては天気によってスモッグがひどい日はも

ちろんあります。ただ毎日ではないですし、

研修で訪れた中国国能中電の発電所環境整

備など成果が上がっている分野があること

を学びましたが、その努力を日本のメデ

ィアはほとんど報道していません。次に、中

国産は質が低い、コピーや偽物ばかりだ

という記事をよく目にします。しかし、今回

伺った愛慕という中国発の下着メーカー

は、たくさんのブランドを持つ巨大グルー

プで、国内では海外ブランドと思われる

るほど高品質でした。価格帯も高いですがよく売れています。既に東南アジアなど海外への出店を果たし、グローバル企業へと成長しています。しかし、日本のメディアから取材依頼が来ることはないそうです。

加えて「報道されていない分野」自体も多いと感じました。政治・経済の分野の報道が多い一方、冒頭で挙げたような現代中国の話題は爆買いなど「日本が好きな中国人」以外ほとんど取り上げられません。エンターテインメントの話題に加え、スマートフォンでのオンライン決済の普及など日本より発展している面の報道もまだまだ少ないです。また、近年京劇は昆劇、能、オーケストラなど異分野とのコラボレーションを行っていることを研修を通して知りましたが、進化する中国伝統文化に関する報道もあまり見かけません。

しかし、これは報道の問題だけではないようです。中国から日本へのエンターテインメント、本、観光業の輸出自体があまり盛り上がりがないようです。例えば旅行業の例を挙げると中国の旅行会社は日本人観光客を中国に迎えるより中国人観光客を日本に送る方が儲かる状態だそうです。旅行産業にとどまらず、この研修で私が痛感し

たのは中国企業にとって日本市場に出てくるインセンティブはほとんどないということとです。小さなマーケット、中国に対するネガティブ報道。加えて愛慕の方がおっしゃっていました。日本は国産ブランドが市場のシェアを独占しているので進出をあきらめたそうで、日本人の国産ブランドに対する信頼の厚さも中国企業進出の意欲をそいでいるでしょう。日本メディアが取り上げる中国一面的であるということはありますが、それ以上にそもそも中国から日本への売り込みが少ないという現状。日本は現在の中国製品に触れる機会がないまま、いつまでも十年前の低品質の中国産のイメージを引きずり、気が付いた時には世界から取り残され、焦燥感からさらに反中感情が高まる―そのような未来が訪れるような気がしてならないのです。

中国の発展を日本に伝えることは中国だけでなく、日本にとってメリットは大きいと思います。「日本は中国より優秀である」と思うのは心地よいですが、それは過去の日本人の遺産です。いつまでもそれに甘えて努力を怠れば、その遺産は数年後という近い将来に必ず使い果たされます。足を引っ張りあうのではなく、ともに切磋琢磨

していけるよきパートナーとしての日中関係、それは日本人が現代の中国を謙虚に学ぶことから始まると思います。日本で触れることができる中国の情報が限られている今、私自身が多様な中国を少しでも吸収すること、これが今後の留学生活でやるべきことではないかと思っています。「中国のこれが大好き」今度は私がそう語れるように。





執筆者一覧（50音順）*所属は2016年11月現在

河瀬雅志（かわせ まさし） 法学部4年

黒岩広大（くろいわ こうだい） 理科一類2年

佐々木智仁（ささき ともひと） 法学部3年

佐藤雅士（さとう まさし） 経済学部4年 留学先：北京大学

陣野真希（じんの まき） 教養学部国際関係論コース3年 留学先：北京大学

竹原遼太郎（たけはら りょうたろう） 文科一類2年

中越亜理紗（なかごえ ありさ） 文学部3年

縫部瑞貴（ぬいべ みずき） 教養学部国際関係論コース4年 留学先：北京大学

村井玲央（むらい れお） 教養学部アジア・日本コース4年

山本さゆり（やまもと さゆり） 教養学部国際日本研究コース3年 留学先：復旦大学

湯川利和（ゆがわ としかず） 教養学部アジア・日本コース4年 留学先：清華大学

吉武にな（よしたけ にな） 理科二類2年



2016 年度中国語上級・北京研修——深思“北京”

協力

中国人民大学文学院
北京戲曲評論学会

引率教員

刘間文俊 総合文科研究科超域文科科学専攻教授

TA

朱芸綺 総合文科研究科超域文科科学専攻博士課程

担当

東京大学リベラルアーツ・プログラム (LAP)

白佐立 教養教育高度化機構特任准教授
新田龍希 同上特任助教
根岸理子 同上特任研究員
岩川ありさ 同上教務補佐員

東京大学トライリンガル・プログラム (TLP)

阿古 智子 総合文科研究科国際社会科学専攻准教授
王前 グローバルコミュニケーション研究センター TLP 中国語 特任准教授
菊池真純 同上特任准教授
藤原優美 同上特任講師
白春花 同上特任講師

フタッフ

青井亭菲 教養教育高度化機構事務補佐員

本研修は、東京大学 TLP 学術奨励金及び株式会社ゼンショーホールディングスの寄付金による支援をいただいて実施されました。

深思北京

2016 年度中国語上級・北京研修報告集

2017 年 3 月初版印刷

編集 / 装幀 朱芸綺

発行 東京大学リベラルアーツ・プログラム

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

TEL 03-5465-7671

URL : <http://www.cgcs.c.u-tokyo.ac.jp/tlp/zh/index.html#four>

E-mail : tlp@cgcs.c.u-tokyo.ac.jp

表紙写真 : by Jonathan Kos-Read

<https://www.flickr.com/photos/jonathankosread/7204319428/sizes/h/>